

第六章 権力の未曽有の驕圧をうち研ぎ、社共の腐敗と武装蜂起主義者の盲動をのりて、十一月佐藤訪米を実力で阻止せよ！

「10・21」のおおむねのあらはれ、社共既指下部の腐敗と盲動、そして空前絶後の武装蜂起主義者の大破産と敵前逃亡。

全学連三千の新宿最先端での衝面たる武装斗争の貫徹。指し示めされた「10・21」は、今や、佐上訪米阻止をめぐり日本階級斗争とりわけ学生戦線において、その生み出された直接的現象とその結果において、極めて激しい再編成の動きを始めている。

それは、一者において「社共共闘」の敗北が、見出し得るにこと、那中、共産党は、その当日において、一切の抗議斗争すら展開し得ないうちにまで至っていると同時に、部談室での大敗北を喫した社会党は、この集会后、十六日「沖繩闘」主催の集会をマニラに上げ、それに由新米定において「全日反共」と「平暴」への正式参加を請うたといえられ、自らの「栗田」へと押し込み、斗争放棄した共産党への対策をなさんとしているのである。しかしながら当然にも、総評指下部、山立野郎からの反撃をうけるを得ないものである。すなわち、予定されている11・13よりも、今回の総評には政治目標だけで統一ストを打てるほどの力はないと、ほとんどこの組合が賃金や合理化、時短などを中心とした斗争とららざるを得ないものであつて、この現象の由に既既指下部の反安保斗争の腐敗と集約のあらわれ、同時に、そうした盲動を直接の根拠として、「反安保反共青年校」の根上げは、当初11・9集会后予定されるがらも、しかし、当日の集会后の参加者の激減と同時に、活動と同じの自治労、全学連、東本府なども青年部の激しい反対の面に、内容的にも貫徹できず、むしろに挫折せざるを得ない。こうして、反共青年委員会への共闘的青年労働者の腹巻から出た防江セオにはおれない、ロートルどもの危柱危論が根拠にあるからに他ならない。

他方、武装蜂起主義諸集団の「10・21」のあらはれ破産とその武装蜂起ホラフキ宣伝集団としてその極左スラ、キリスト的方針の非「現実性」が顕微鏡にうつると同時に、十七日を目前に控えて「斗争を要し振舞うべき力量を疑しうるとどう力

つし、ガキ的に体制を打ち固めざるを得なくなつてきているのである。わが全学連「日大反共学生会議」の、「10・21」総括論争の提題「ローエフナー」NO3-4の、そして「総括集会」の果現を克ち得ることによる、その深化の前に、完全に瓦解せざるを得ず、その大破産を、現実的な破産にまで、その系譜は「深化」しているのである。また、理工学部反共学生会議の諸君の手によつて、その左翼的革命的果現を克ち得た。理工学部斗争委員会主催「五学部合同安保沖繩討論集会」において、その武装蜂起ホラフキ宣伝集団以下的にふるまうことによつてかくもわが理斗委内革命的左翼的諸友が、この急求を回避せんとする理工反共会議中核派日和良主義者の諸君たちの「10・21」斗争総括を回避した小細工はその発言を余中で傾倒せざるを得なく、あつた破産を学生大衆の前に露呈したことにそれは徹底的にのりていられるのである。すなわち集会が「10・21」総括を深化し、安保・沖繩斗争論争の深化を克ち得り、かつ目前に控えた佐上訪米阻止斗争を、理工学部の庄什曲、左翼的大衆を組織化するという討論集会であつた。

そして、「10・21」再び帰ることなき決死行へ出陣せよ」と叫びついでいたMシ派は泉神田がリラと深夜新宿もくりコシをしかあつたことが出来たかのためである。そして「帰つてきた日和見分る連」は、日大反共学生会議三百の秘録を見るや、「やう、どうしようもない」といふこと、その挫折感を吐露せざるを得ないで、そのショーモ一更を露呈しているのである。全日SFシ書記長であり、そしてSFシ内日和見分るS君、君の事後無断反論とは、諸君たち武装蜂起ホラフキ宣伝集団の言葉にうつらばつた。「日和良主義的にふるまつてかかる危柱の時代にはただきつがされる」と。これをめつてS君のプラキア症、反威主義、劇痛ホラフキ症候群による泉神入院に際しての「帰ることなき決死行」へのおめがれの言葉としよう。

反共学生会議の諸君、そして読者諸君へ

わが武装蜂起ホラフキ宣伝諸集団とりわけ、中核派、Mシ派の空前絶後の大破産と敵前逃亡は、